

普通だけど普通じゃない！宮代町の「ヒト・モノ・コト」を集めたPUNCHな冊子！

■ 本誌に掲載させていただいたPUNCHな方々。（掲載号順・50音順）

PUNCH

2

宮代



裏表紙では、これまで本誌に掲載させていただいた方の似顔絵イラストを掲載しています。発行を重ねるごとに人数も増し、どんどんイラストは小さくなっていきます。目指すは町民と宮代に関わる人、全員掲載！

■ 第2号の目次

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 2P: 進修館写真集 | 7P: パロキアの記憶（岡村由紀江さん） |
| 3P: 象設計集団 富田玲子さん | パロキアのマスターにお話を聞きました。 |
| 今号の題字 村上真央さん | 8P: 進修太鼓保存会太鼓集団“風” 主宰 横手俊一さん |
| 4P: 鈴木工務店 代表取締役 鈴木充さん | 9P: 宮代春高会 掛川勝一さん |
| 5P: ドイツパンのお店 アムフルス オーナー 山本毅さん | 10P: 宮代町社会福祉協議会 高橋英治さん |
| 6P: みやしる保育園 吉田直子さん | 11P: さいかつ式典 金子哲也さん／コラム |



宮代町地域資源発掘情報誌「みやしるPUNCH」第2号 第2版：2020/07/01 発行 定価100円
発行元：宮代町立 コミュニティセンター進修館
（指定管理者：特定非営利活動法人 MCAサポートセンター）
住所：〒345-0822 埼玉県南埼玉郡宮代町笠原1-1-1 TEL/FAX：0480-33-3846
URL：http://www.shinsyukan.or.jp E-mail：info@shinsyukan.or.jp

前回に引き続き、進修館を設計した「象設計集団」の富田玲子さんにお話を伺うため象設計東京事務所を訪れたのは、2019年11月下旬。会話はその1か月ほど前に関東・甲信・東北地方に大きな被害を与えた台風19号のことから始まり、1947年に利根川の決壊をもたらしたキャサリン台風のお話につながっていきました。



富田玲子さん
進修館を設計した「象設計集団」の創始者のお1人。現在は「象設計集団東京事務所」に所属。

当時原道村（現在の加須市）にある祖母の生まれに10人近くで疎開していました。敗戦後すぐにキャサリン台風で利根川が決壊しました。決壊した地点がかなり下流にあったので大人たちは楽観的で私たちは避難しないでしたのですが、だんだん水が増して来ましたが、そして水塚（敷地内の小山）に逃げることにりましたが、その頂上にも水が増して来て、大人たちが「子どもは杉の木にくっついておきましようか」など相談しているのがきこえて、こわかったです。その時、すでに土手に逃げていた人々の一人が小舟で助けに来てくださったのです。小舟の上からは家々の屋根と高い木が広い水面から出ているのが見え、それは美しい風景でした。こわいのに美しかった。土手にたどり着くと、遠い下流で真っ黒な水が堤防のさけめから滝の様に流れ落ちていくのが見えました。その風景はあとから何度も夢に見ました。

もしキャサリン台風のような大きな台風が宮代を襲ったとしても、すり鉢状になっている芝生広場を登った先にある進修館の2階は水浸しない「希望の丘」なのです。

進修館を設計するとき、齋藤甲馬町長から「みんなが集まる場所をつくってほしい」と言われました。いつもどんな建物を設計するときも、建物と空間と人間が親密な関係になるといいと思います。家具まで設計することがありませんでした。進修館では

後日、富田さんからいただいたメールに、こんな言葉がありました。

「『どこにもないものをつくらう』という甲馬町長の夢は、どこにもない建物を造るというより、どこにもない場所と物語りを創るということだったのではないのでしょうか。」

（文・渡邊）

幸運なことに家具も設計することができて、人と家具と建物という関係を考えることができました。例えば進修館の2階ロビーに置かれている机は三角形のような形をしています。平行ではなく角度がついていると、意外と他人が一緒に机について座っていても平気なものです。小ホールや円卓ではどの議員も最前列に座ることになって議論が活発になるでしょう。家具の形や配列によって、人の気持ちが変わります。

建物は人と人との関係を作り出すもの。いろいろなひとがいろいろな使い方をし、いろいろな風景が生まれ、いろいろな関係が生まれます。その場に一緒にいる人だけではなく、建物を作る人とそこを訪れる人との関係も生まれます。建物は長く生きて、出来たころいた人はいずれいなくなりますが、建物を介して人と人との関係が紡がれていったらいいですね。



象設計集団 東京事務所にて
午後の日差しが降り注ぐサンルームで、進修館にまつわる資料に囲まれながらお話を伺いました。



今号の題字

村上真央さん
進修館を設計した「象設計集団東京事務所」に所属する若手建築家。進修館40周年記念企画にも携わりました。

進修館写真集

コミュニティセンター進修館は「象設計集団」が設計した、とてもユニークな建造物です。「親しみやすく入りやすい空間」「まちの風景に調和する建物」、それらを意識して設計された進修館は、光の加減や季節の木々の彩りによって、素晴らしい景色を私たちに見せてくれます。1980年7月に開館した進修館。その40周年を記念して、写真集のコーナーを作ってみました。



蔦が絡まる外壁。建物と植物のコラボレーション。



この時期のコロネードは爽やかな風が通ります。



テラス。作りが進修館らしい。



青々と茂った芝生が美しい「芝生広場」（四季の丘）



和室の縁側から。緑は葡萄の樹。



食堂前のホール。涼しい場所。



光注ぐ大ホール前の光路。



夜の夜の進修館は、とても幻想的。



昼は自然の光、夜は人工的な光が進修館を演出。

今回は進修館の5～7月の風景を集めました。この時期はとにかく植物の緑と空の青が綺麗で、館外でカメラを構えると「若々しさ」や「爽やかさ」を感じる写真が撮れます。館内では屋外から差し込む光が綺麗なので「眩しさ」や「陰影によって生まれる涼さ」を感じる写真が撮れます。夜は幻想的。空気がクリアで空が綺麗なので自然が作る闇と人工的な光による美しい写真が撮れます。（文・写真：高濱）



夕景。緑になった八重桜が夕日と絡まり情緒を生み出します。

ドイツ国家認定の製パンマイスター山本毅さんがオーナーのドイツパンのお店「アムフルス」は、2011年に横浜の綱島にオープンしました。その後、2014年に姫宮の県道85号（春日部久喜）線沿いの一角に移転。綱島のファンに惜しまれつつ宮代町に移転してきたアムフルス、そして、そのオーナーの山本毅さんは一体どんな方？いろいろお話を伺ってきました。



山本毅さん
ドイツ国家認定製パンマイスター。
店内に並ぶ本格ドイツパンを求め
遠方から多くのお客様が訪れます。

ドイツパンのお店「アムフルス」は、2014年に横浜から宮代に移転しました。横浜時代はドイツパン専門店だったそうですが、宮代に来てからは、お客様にいろんなパンを楽しんでもらいたいと思い、本格的なドイツパン以外に日本の菓子パンや惣菜パンのようなものも扱うようにしたそうです。そして、具材はなるべく宮代産のものを使うようにし、近隣

宮代町に移転

ドイツパンの

山本さんは横浜生まれの横浜育ち。10代の後半に「手に職を！」と思い立ち、パンの道に進んだそうです。初めは一般的な日本のパン屋に務めたそうですが、どうしてもしっくりこず、パンの本場のドイツに修行に行ったとのこと。特にあてもない状態で単身ドイツ乗り込んだので語学研修からスタート。その後、パン職人の修行をし、1つの道を極めた職人が取得できる「ゲゼレ」というドイツの国家資格を取得。さらに、ドイツ・ミュンヘン近郊のオーガニック農場「ヘルマンスドルフ」のパン部門に入社し、製パンのみならず、製菓など学べるものは全て学び、「ゲゼレ」の上位資格である「マイスター」を取得されました。マイスターはドイツでも簡単には取得できず、ましてや日本には数名しかいない、とても凄い資格です。

ドイツ国家認定製パンマイスター



ドイツ・ミュンヘン近郊にあるオーガニック農場「ヘルマンスドルフ」の製パン部門の様子。山本さんは、この製パン部門の主任格だったそうです。ドイツで外国人が、ましてや日本人が主任格として従事するのは相当珍しいこと。マイスターであることよりも、実はこちらの方が凄いのではないかと思います。



山本さんは、インターンや修行にきた方々に、惜しみなく技術を提供すると仰っていました。「自分の技術を全て託すのは、怖くないですか？」と訪ねたところ、「技術は託せても、自分がこれまで培ってきた経験は誰にも真似できないから。」とのお返事。「自分が持っている技術を次世代につないでいくことも、マイスターの役目なんです。」そう仰る山本さんには、揺るがない自信が漲っていました。

つないでいくこと

山本さんは、インターンや修行にきた方々に、惜しみなく技術を提供すると仰っていました。「自分の技術を全て託すのは、怖くないですか？」と訪ねたところ、「技術は託せても、自分がこれまで培ってきた経験は誰にも真似できないから。」とのお返事。「自分が持っている技術を次世代につないでいくことも、マイスターの役目なんです。」そう仰る山本さんには、揺るがない自信が漲っていました。



「アムフルス」とはドイツ語で「川のほとり」の意味。横浜・綱島のお店が鶴見川の近くにあったことから、その名がついたそうです。今のお店も古利根川の近く。アムフルスは今も昔も川に縁あるパン屋さんなのです。店内にズラッと並ぶパンは、ライ麦100%のロッゲンやヴァイツェンミッシュなど、本場の製法で作られたドイツパンのほか、食パン・菓子パン・惣菜パンなどその種類は様々。ドイツパンに対する愛情と強いこだわりを持ちつつも、地元のお客様のニーズに合わせる柔軟性。それがアムフルスの人気の秘密だと思います。



今回お話を伺って「とても強いこだわりを持ちつつも、とても柔軟な方。」という印象を受けました。山本さんは「ドイツで学んだのは製パン技術だけではなく、それにまつわる様々な物事の循環という考え方。」と仰っていました。そしてそれが山本さんの人生観に大きな影響を与えているそうです。（特にオーガニック農場「ヘルマンスドルフ」での経験が生きているそうです。）だから今、アムフルスは人々が集まるコミュニティセンターみたいになっているんだなあ、と納得しました。（文・高濱）

「お客様との出会いとつながりを大切にしています。」「本当のおつきあいは、建ててからが始まりです。」「鈴木工務店のホームページには、このように記されています。売ったら終わり、建てたら終わり、ではなく、そこから始まる関係こそが大事。繋がりが続けることが大事。そのような方針で会社を運営する鈴木さんはどのような方なのか。お話を伺ってきました。



鈴木充さん
大工としてこの世界に入り半世紀。
これまでに約1800棟の家づくりに
関わってきたという実績が凄い！



鈴木工務店がお客様と共に作り上げた家。どれも素敵ですね。

感謝の気持ち

毎年夏になると、大学通りの沿道にとてにぎやかな一画が現れます。その正体は鈴木さんのお客様や取引先の方々などを招いて開催している納涼祭です。「家を建てたりリフォームしたりするのは、決して安い買い物じゃない。その買い物先として鈴木工務店を選んでいただいているのは、とてもありがたいこと。」鈴木さんはいつも「感謝の気持ちが大切」と仰っています。その感謝の気持ちの現れの一つが納涼祭なのでしょう。

信頼関係が大事

納涼祭の他にも木工教室の実施や「工務店だより」の発行など、鈴木さんは常にお客様への配慮を意識されています。鈴木さんは「お客様が考えていた以上のものを作れば、お客様が喜んでくれる。そうすれば、次の仕事につながる。それを継続するためには、お客様と信頼関係を築き、ずっと関わり続ける必要がある。」と仰っていました。「連絡がなければ放置する」ではなく、「こちらから歩み寄ること」「接してお互い理解し合うこと」を重視されている点が、「信頼関係が大事」と仰る鈴木さんのお考えの現れだと思っています。

まちづくりの要

鈴木さんは、鈴木工務店の社長として、宮代町商工会の会長として、また一個人として、宮代町のまちづくりに貢献されています。まちづくりについては、「定住人口（町に住んでいる人）こそが、まちづくりの肝」「地域でお金を回すことが大事」と仰っていました。地域の活性は、経済の活性とは切り離せないもの。その経済をその地域の人が動かすことが重要。そしてそのためには、人と人の信頼関係が大事。この鈴木さんのお考えは、まちづくりの要であるように思いました。



「鈴木工務店だより」は内容充実！

今回お話をいろいろ伺って、私が一貫して感じたことは、鈴木さんの「宮代町を住みよいまちにした」というお気持ちでした。そして、もし私が家を建てたりリフォームするのであれば、このようなお考えの方にお願ひすれば間違いのないだろうなあ、と心から思いました。（文・高濱）



産業祭恒例の「釘打ち大会」



木工教室では自ら手ほどき。



納涼祭は、毎年たくさんの人で賑わいます。



パロキアの記憶

1977年から2016年11月までの約39年間、宮代町で営業していた人気の喫茶店「パロキア」。その長い歴史の中には、数多くの宮代町民たちの思い出が詰まっています。そんな宮代町とともに歩んできたパロキアでの様々な出来事や町民たちの思い出を紹介するこのコーナー。今回は、昔も今も、そして、ご姉弟でパロキアの思い出をたくさん紡がれた岡村さんにお話を伺いました。



岡村由紀江さん

スポーツに、地域活動に、そして家業の農業に、いつもパワフル！熱いハートと深い懐の持ち主。



マスターと友人だった岡村さんの弟さん。お姉さんはパロキアでカフェタイムを満喫。弟さんは閉店後に店長と一緒に遊んでいたそう。ご姉弟とも、それぞれ別々ではあるけれど、パロキアさんとは縁が深かったんですね。

パロキア。居心地のいいところ。宮代のお店は、チョット隠れ家みたいなお店。店内もチョット暗い。菖蒲のお店は、一日中明るく店内の雰囲気お洒落。変わらないのは、スパゲッティ等、昔からの味。私のお勧めは、昔ながらのナポリタンスパゲッティ。しっかりケチャップが絡まった味。どこか懐かしい。我が家で作るスパゲッティで、パロキアのカルボナーラと普通のカルボナーラがあります。主人はパロキアのカルボナーラが大好きです。コーヒを飲みながら色々考える時間を過ごしたこともありました。



深い思い出は、弟が最期に食べた昼食が、パロキアのスパゲッティでした。弟が亡くなってから知ったことですが、店長さんと弟はお店が終わってから友人として一緒に遊んでいたとの事。店長さんから亡き弟の私達の知らない一面を後日聞くこともできました。命日には特別に持ち帰りを作ってもらい仏壇に供え、家族みんなで食べました。私は、今回の取材で初めて榎垣さんという本名を知りました。私は「パロキアの店長さん」でした。不思議な縁で、今の職場から3分ほどの所にパロキアさんのお店が再びオープン。パロキア店長の癒やしの笑顔に逢うと、時にはタイムスリップして昔の時間に戻れそうな気がします。行きつけのお店って、食事もちろん楽しみですし、お店の店長に会いたいと思う気持ちもありますね。

パロキアのマスターにお話を聞きました。



とてもレトロな旧パロキア店内。でもオープン当時は最先端のお洒落なデザインだったそうです。オープンしてから39年間、一度も改修しなかったそうです。

パロキアが開店したのは1977年。その翌年、世間では「スペースインベーダー」というゲームが大流行しました。それに合わせて、喫茶店の多くがテーブルをインベーダーゲームに変えました。ですが、パロキアでは、確実に儲かることがわかっていただけ、すべての業者の営業を断ったそうです。その理由は「店の雰囲気が変わってしまうから」。パロキアは人々の憩いの場所。ゆっくりくつろぐ人もいれば、待ち合わせに使ったり、仕事や勉強をする人もいます。友人と談話する人もいれば、時には知らない人同士の交流が始まったりもする。店内はいつもお客様の笑顔で溢れていたそうで、榎垣さんも、息がでないくらい毎日笑っていたそうです。その雰囲気を変えたくなかった。流行には飛びつかず、お客様のための空間を守り続けた榎垣さん。人を大切にしてきたお店だから、今なおパロキアは愛されているんだなあ、と納得できたインベーダーのエピソードでした。（文・高濱）



榎垣豪男さん

喫茶パロキアを経営。ファンの多かった宮代町のお店は惜しまれながら閉店し、現在は久喜市菖蒲で元気に営業中！

みやしろ保育園 吉田 直子 さん

いつも子どもたちの笑い声が聞こえる宮代町の公立保育園「みやしろ保育園」は、一時保育や病後児保育など、子育てする人にとって強い味方です。保育園に通う子どもたちは、様々なことができるようになる成長著しい時期です。保育園の先生は、そんな子どもたちとどんな思いで向き合っているのでしょうか。いつも元気な直子先生にお話を伺いました。



吉田直子さん

元気な子どもたちよりもっと元気！直子先生の周りにはいつも子どもたちの笑顔がいっぱいです。

宮代町で生まれ、高校生までを地元で過ごし小さい頃からの夢だった保育士になりたいと選んだ短大は片道2時間半かかる都内。都内への憧れを大きく描いていましたが、いざ通ってみると人の多さや気ぜわしさが窮屈で帰りの電車の春日部あたりから空気が変わるのを感じ、ホッと気持ちが安らぎました。空気が変わるというのは、季節により田んぼの匂いや虫の音、空の色から感じたのだと思います。結局やっぱり落ち着く所は地元でした。ということで社会人デビューは母園の幼稚園に縁あって勤めさせていただきました。子どもの頃にお世話になった園に先生として勤務できる、そんなことあるんだなと感慨深く思いながら無我夢中で子どもと接していました。危なっかしい新卒の私を周囲の先輩方や保護者の方々は優しく見守っていただき感謝しきれません。その経験から次に、保育園の子どもたちに興味を持ち、今があります。家庭を持っても宮代町に住み、私の子どもたちも宮代町で育ててもらっています。ずっとずっと宮代町にお世話になっているのです。私の幼少期は、姫宮神社で伍けりやかくれんぼをしたり、裸足で川に入りザリガニ取りや魚つりも大好きでした。いなごをビニール袋一杯捕まえたことあります。夏には家の近くの田んぼに蛭がたくさん飛んでいました。地区で開催される夏祭りでおみこしをかついだことも思い出します。のびのびとし



約20年前の西原保育園（現みやしろ保育園）で年長組を担当し、スキップ広場によく散歩に来ていました。



運動会は町立保育園合同で開催しています。この頃は現庁舎のある広場で、現在はぐるるにて行っています。



た楽しい思い出ばかりです。大好きな町に住み、夢であった仕事に携わり「幸せだな」としみじみ感じます。みやしろ保育園に配属になり4年目。保育園の子どもたちや保護者の方々と「おはようございます」「また明日」と挨拶をかわすと元気が出ます。また、宮代町Ⅱ小さくても輝く町、なので、毎年4月に新しいおもとだちに会えることが、町中にお知り合いが増えるようで嬉しいつながりだなと思っています。日々成長する保育園の子どもたちと接する喜びに加え、卒園児の大きくなった様子を買い物等で外に出てばったり会い知ることができたり、学校の授業やボランティアで園を訪問してくれたりすると、とても嬉しいのです。「保育士になりたい！」なんて聞いたら涙ものです。ぜひぜひ一緒に保育士として働く機会があったら保育士冥利につきますなど夢は広がります。

ります。夢がかなった時に「先生変わらず元気だね」と言ってもらえるように、日々保育園の子どもたちから元気パワーをチャージしてもらっています。じきに保護者として保育園にお子さんを預ける卒園児にも会えるかな。宮代町が好きで、住む・育てる・働く、を楽しむ仲間が増えて欲しいと思います。宮代町のみなさんに今までのお礼とこれからのご挨拶をさせていただきます。『充実した毎日があります。これからもよろしく願います！』

掛川さんと初めてお会いしたのは、宮代町立図書館のロビーで開催されていた「宮代春高会 美術クラブ」の美術展会場でした。絵画・写真・書など本格的な作品が展示されている会場では、紳士の方々がにこやかに受付をしています。「春高会」って、春日部高校と何か関係があるの？どんな会なのだろう？という事でお話を伺ってきました。



掛川勝一さん
埼玉県立春日部高等学校の同窓会
「宮代春高会」宮代支部の美術クラブで活躍中。

また、地域では「宮代春高会」に所属し、積極的に活動しています。「宮代春高会」は今年で結成22年歴史を持つ、宮代在住の春日部高校卒業生により構成された同窓会で、現在約100名の会員が在籍しているそうです。ゴルフクラブ、カラオケクラブ、美術クラブ、園芸クラブ、旅行クラブ、体操クラブなど、様々なクラブ活動があるそうです。先輩後輩

退職を機に、掛川さんは風景写真撮影を中心に活動する加須の写真クラブに入りました。折しも時代はフィルムからデジタルへ移行する時でした。デジタルカメラを購入し約4年間楽しく学び、「カオス」と題した渡良瀬遊水地で朝日に照らされ朱色に染まった雑木の写真で埼玉県展に入選しました。以来今日にいたるまで公募展はこの埼玉県展のみに絞って写真部門に毎日挑んでいるそうです。



『カオス』掛川勝一 2010年 第60回 埼玉県展入選



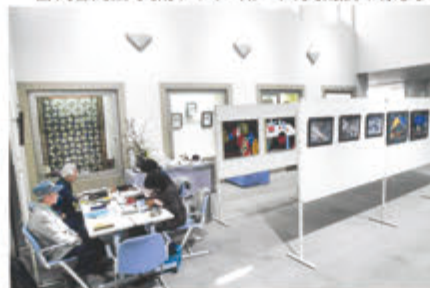
『凍て付く大滝の滝』掛川勝一
2018年 第68回 埼玉県展入選



『幽谷月照』掛川勝一 2019年 第69回 埼玉県展



宮代春高会 美術クラブ 第17回 美術展の様子。



宮代町民まつりや文化祭など、大きな行事の度に耳にする勇壮な太鼓の演奏。その中心にはいつも横手さんがいます。笠原小学校の体育館で太鼓の練習会や体験会で指導をしていることは知っているけれど、普段の横手さんはどんな方なのでしょうか。そして進修太鼓というのは「進修館」と何か関係があるのでしょうか。仕事場でお話を伺ってきました。



横手俊一さん
太鼓集団を率いて、いつも囃楽と町の催しに登場。若手の育成にも尽力されています。

取材に伺ったのは2019年12月。製造の仕事は閉じ販売のみにすることになったとのことで、ちょうど工房を終いにするタイミングでした。横手さんや職人さん達が丹精込めて仏壇をつくっていた工房には、使い込まれた工具や機械が置かれていました。

横手さんが兄の康雄さんと共に宮代町百間で営んでいる仏壇の製造販売業「横手仏具店」は、先代である横手さんの父が、東京での年季を終えて開業しました。ご自身は高校卒業後、自動車会社で修理の仕事に就きましたが、3年くらいたったころセールの間に回されたのを機に退職し、加工から塗りまで仏壇作りのすべてを行う家業に入りました。横手さんはその技を見よう見まねで習得したそうです。工房では、制作する仏壇に奈良正倉院の宝物の素材としても有名な黒檀を使用しています。この部材は緻密でとても重く、水に沈んでしまいます。またとても硬いため、加工する際には垂直に歯を立てた特別なカンナで「かつぱぐ」ようにするそうです。合板を使っているものと違い、黒檀のみを使用している高級な仏壇ですが、すべての過程を手がけることで、高い品質ながらコストを抑えて製造されているそうです。顧客には地元の方も多く、家族構成や家屋の間取りなども知った上で制作しているとのことでした。こだわりの職人としてのものづくりに取り組み様子は、大手就職情報誌の取材を受け特集記事として掲載されたこともあったそうです。



残念ながら閉鎖された「横手仏具店」の工房の様子。ここにある工具や機械を見ると、この場所で紡がれてきた職人さんたちの仏具製造への想いや職人魂のようなものを感じることができました。

横手さんは、「宮代進修太鼓保存会 太鼓集団「風」」の主宰としても活躍されています。保存会のメンバーは現在34名。進修館を拠点とした独自の太鼓集団として始まり、宮代町民まつりや地域行事で演奏活動を行っています。宮代町のスラグ（ゴミの焼却灰）の受入れをしている福島県小野町へ演奏に行ったこともあるそうです。横手さんは、体験会を開催したり小学校のクラブ活動に協力するなど、進修太鼓の音色を若い世代にも繋いでいくために精力的に活動をしています。地域のつながりを大切にし、良いものを次の世代につないでいこうとしている横手さんからは、自分の暮らす町への深い愛情が感じられました。（文・渡邊）

■ 宮代進修太鼓保存会 太鼓集団「風」の活動の様子。町民まつり・町民文化祭のほか、小学校への訪問や他の地域の訪問など精力的に活動されています。



福島県小野町産業祭（1999/11/13）



彩の国まごころ国体 アーチェリー競技開会式（2004/10/23 宮代町会場にて）

中国の思想家 孔子の言葉が元になった『論語』為政篇の「四十にして惑わず。」に由来して、満40歳は「不惑」と称されています。宮代町では、「不惑」の人が実行委員となり「不惑のつどい」という懇親会が毎年開催されています。一体どんな催しなのでしょう。実行委員を経験された金子さんにお話を伺いました。



宮代町では20年以上前から、町主催で「不惑のつどい」というイベントが行われています。その年に40歳（不惑）を迎える人達が集まる『二回目の成人式』と言われていたイベントです。2011年に私も40歳になり、楽しそうなおイベントなので友人と一緒に実行委員をやらせていただくことにしました。行ったのは2012年2月下旬、会場は進修館・大ホール。実行委員のメンバーで数ヶ月前から重ねた打合せでは、進修館の集会所などに何度も通い、事前の準備やリハール・本番では大ホールだけでなく進修館じゅう走り回りました。結果、イベントは大成。協賛していただいた商店の皆さん・進修館や役場のスタッフの方々・参加してくれた仲間たち。多くの方々のおかげでとても楽しい1日となりました。またイベントを機に友人同士連絡を取り合い、その後も集まる機会が増えたようで、とてもいいイベントだったと思います。そんな思い出深いイベントを行った進修館なので、それ以前よりも愛着が

金子 哲也さん
宮代生まれ宮代育ちの心優しいパパ。2011年には「不惑（40歳）のつどい」実行委員として活躍しました。



金子さんが実行委員をされた「第18回 不惑の集い」の様子。

コラム「和戸教会 牧師さんのお引越し」



和戸教会は明治11年10月26日に設立された、埼玉県最初のキリスト教会です。設立当初の信徒数は13人、数年後には60人以上。当時の和戸村の人口が約600人だったことから考えると、和戸教会の地域における信頼は当時から厚かったようです。ちなみに現在の建物は、2000年に建てられた3代目の会堂です。



和戸教会は明治11年10月26日に設立された、埼玉県最初のキリスト教会です。設立当初の信徒数は13人、数年後には60人以上。当時の和戸村の人口が約600人だったことから考えると、和戸教会の地域における信頼は当時から厚かったようです。ちなみに現在の建物は、2000年に建てられた3代目の会堂です。

和戸教会に縁のある方々がお手伝いに来るにつれて、和戸教会の地域における信頼は当時から厚かったようです。ちなみに現在の建物は、2000年に建てられた3代目の会堂です。

和戸教会に縁のある方々がお手伝いに来るにつれて、和戸教会の地域における信頼は当時から厚かったようです。ちなみに現在の建物は、2000年に建てられた3代目の会堂です。

(文・渡邊)

地域福祉の拠点として頼りにされている宮代町社会福祉協議会。そこには、地域の人々が安心して暮らせるようにと日々相談や支援事業に携わっている職員の方々がいます。相談者個人の生活と向き合う責任の重い仕事を担いながらも、そこにやりがいを感じているという高橋さんに、ご自身の仕事観やプライベートについて伺いました。



高橋 英治さん
福祉分野のエキスパートとして社協で活躍。様々な相談に親身になって対応していただきます。



浦和レッズのサポーターとして、全国を駆け回ります！



社協主宰「縁じょうフェスティバル」の様子。「縁じょう」とは「楽しみながら人と人がつながるきっかけ作り」を表した言葉。



人とのつながりを大切に！
社協（地域福祉を推進する団体）の仕事には終わりがありません。どのような地域にすれば、住民の方が安心して暮らすことができるのか。どのような支援が正解なのか。どのようにしたら人を助けられるのか。はたして相談者はどのようなことを求めているのか。そんなことを毎日考えながら仕事をしている。また、支援の一つとして同じやり方は無く、その人にあったやり方を見つけていく必要がある。

社協（福祉）の仕事は難しい。でも、すぐやりがいを感じる。その人の性格、生まれ育った家庭環境、現状の問題点等、いろんな要素を頭に入れて支援にあたらないといけない。もちろんすべて社協の職員だけでは出来るものではない。地域の方の力が必要である。だから、社協がその地域との結び付きを強め、困っている方や不安な方を地域全体で支える街づくりを構築していかなければならない。



浦和レッズのサポーターです!!
私の趣味は、スポーツ観戦（特にサッカー・野球）、旅行、食べ歩き。それを一気に叶えられるのが、スポーツ観戦を中心に考えた旅行である。私は、浦和レッズのサポーター（笑）。ただのファンではありません。あくまでサポーターです!!浦和レッズのサポーターをやっている、いろんな世代の仲間（10代〜50代）と知り合うことができた。時には自宅でサッカー観戦し、皆で盛り上がっています（笑）。一番楽しみなのは、仲間とサッカー観戦を中心に考えた旅行。これまで、静岡、神戸、大阪、仙台等いろんなところに行きました。昨年は、日本を離れて1泊3日で中国の広州まで行きました。旅行では、観光、ご当地の美味しい食事、そしてメインはサッカー観戦。これが私たちの定番です。（笑）

仕事においてもプライベートにおいても、人とのつながりは大切である。日々、人の大切さ、人の大きさ、人の可能性を感じています。



サッカー観戦で訪問した中国の深仙駅



陳氏書院（中国）



仙台で食べたザ・海鮮



神戸ではスイーツを堪能